

第13回青森県気象災害連絡会

日時：平成24年6月29日（金）13:30～15:30

場所：弘前大学八甲田ホール（弘前市文京町3）

13:30～13:45 総会

- 原則年1回、大きな気象災害があった場合は都度連絡会を開催する方針へ変更
- 平成24年度の幹事は下記の通り

会長

児玉 安正（弘前大学大学院理工学研究科 准教授）

幹事

樋川 満（国土交通省青森河川国道事務所）

佐々木 幸雄（気象庁青森地方气象台）

三浦 巧巨（青森県総務部市町村振興課）

笹森 正幸（青森県県土整備部道路課）

木村 利行（青森県産業技術センター 農林総合研究所）

岡前 憲秀（青森県気象予報士会）

石田 祐宣（弘前大学大学院理工学研究科 助教）

<特集：年末年始の豪雪>

13:45～14:25 「2012年の冬の特徴について」

・・・泉 泰明（青森地方气象台防災業務課 防災気象官）

14:25～14:40 「青森県における豪雪災害」

・・・石田 祐宣（弘前大学理工学研究科）

<調査研究報告>

14:40～14:55 「2012年6月「なつしま」観測航海参加報告」

・・・児玉 安正（弘前大学大学院理工学研究科）

14:55～15:20 総合討論

（敬称略）

要旨

<特集: 気象防災情報の伝達方法>

2012年の冬の特徴について

青森地方気象台防災業務課 防災気象官 泉 泰明

2012年の冬の特徴について、「早い積雪」、「遅い雪融け」、「低温」、「多い積雪」、「しかし降雪量はそれほど多くない」という状況であった。これらの原因としては、偏西風が大きく蛇行したことで日本付近では通常より南下したこと。また、蛇行によりシベリア高気圧が強化されたため、例年より強い寒気が12月中旬～4月上旬まで継続して日本に流入したことが挙げられる。

なお、偏西風の蛇行は過去最大規模であったが、その要因としては、北大西洋熱帯域及びインド洋東部～インドネシア付近での活発な対流活動とラニーニャが影響したものと考えられる。

青森県における豪雪災害

弘前大学大学院理工学研究科 石田 祐宣

2011年12月から2012年に掛けて、雪による災害が目立ったため、その要因を調査した。最深積雪の記録を見ると、この冬は、日本海側だけでなく太平洋側(下北・三八地方)などで大きな値を示していた。この原因は、降雪量が平年並みだったにもかかわらず、気温が例年に比べて低かったことにある。1984年以降の県内の雪による災害を調べてみると、この冬の死傷者が過去最多であり、その8割が除雪時の事故であることがわかった。この傾向は平成17,18年の豪雪災害と同様である。低温の冬は、早期から積雪があるために除雪する機会の増加につながり、除雪に関わる人員の高齢化と相まって死傷者が増加することが考えられる。また、被害額の内訳では、1980年代に土木系(融雪)による被害額の割合が大きかったが、近年は農林系(枝折れなど)の被害額が上位を占める傾向が見られた。

<調査研究報告>

2012年6月「なつしま」観測航海参加報告

弘前大学大学院理工学研究科 児玉 安正

日本の南岸を流れる黒潮は、大量の熱を熱帯から日本周辺海域に輸送しており、日本の気候に大きな影響を与えている。黒潮の影響に着目して、日本周辺海域で大気海洋相互作用の研究を行う研究プロジェクト「科研費新学術領域研究：気候系のhot spot 熱帯と寒帯が近接するモンスーンアジアの大気海洋結合変動 研究代表者：東京大学教授 中村尚」が平成22年度～26年度の予

定で行われており、発表者も分担者として参加している。本年7月に、黒潮続流域において3隻の観測船を同時に用いた、大気海洋相互作用の特別観測が行われた。発表者は、同時観測のおよそ20日前に現場の状況（続流や水温前線の位置など）を把握することを目的とした先遣隊の航海に参加した。幸いにも非常に顕著な水温前線に遭遇することができ、さらに水温前線を境として大気境界層の構造も変化するなど興味深い研究成果が得られた。発表では、「海洋研究開発機構なつしま」船上で行われた様々な観測の様子を写真を使って説明した。